

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐる

Ælfric's Attitude to Germanic Pagan Belief: A Study of 'hæðen' in His Sermon 'De Auguriis' from *Ælfric's Lives of Saints*

和田 忍

要 旨

アルフリッチによる『聖人伝』(Ælfric Lives of Saints)には、「呪術について」という説話が収録されている。この説話の中には hæðen 'heathen' の語が5度出現し、聖書的な文脈での「異教徒」の意味で使用されている。本論では、アルフリッチが hæðen という語彙に上述の意味に加えて、ヴァイキングの存在も含めていると考えられることを示す。アルフリッチは、この「呪術について」の説話において、ヴァイキングを示す「デーン人」(ða Denisca 'the Danes') という語を使用していない。それ故、彼は直接的にヴァイキングを言及していない。しかし、このテキストにおいて、hæðen とともに scucca (sceocca) といった語彙を取り上げて分析すると、アルフリッチはこれらの語彙を通じて、ヴァイキングを意識していることがわかる。そして、アルフリッチは、キリスト教の教理を浸透させるという説教集の目的とは別に、この呪術についての説話を通じて、ヴァイキングがイングランド人に対して脅威となる異教徒であると示唆している。

キーワード

アルフリッチ, 聖人伝, 聖書の世界観, ゲルマン民族文化, ヴァイキング

0. はじめに

アルフリッチ (Ælfric) は、10世紀末から11世紀初頭にかけて、多く説

教 (homily) を書き残している。彼の説教内容は多岐にわたるが、代表的な説教集である『聖人伝』(Ælfric Lives of Saints) の中に「呪術について」(De Auguriis 'On Augury') という話がある。この説教の概要は、キリスト教の伝道者である使徒パウロが、偶像崇拜は悪であるということを旧約聖書の内容を利用して語っているというものである。その「呪術について」の説教の中で、偶像崇拜を行う者たちを表す語として、しばしば「異教徒」hæðen 'heathen' との語が何度か使用されている。この説教は聖書の内容を利用しているので、ここで異教徒といえは、ユダヤ教徒などの新しい神となったキリストを信じない人々を指していることは明確である。しかし、アルフリッチが生きていた時代のイングランドでは、旧来のゲルマン民族文化を依然として保持していたヴァイキングが猛威を振るっていた。アングロ・サクソン民族の出自を持っていながら、すでにキリスト教教化していたイングランド人たちは、こうした「異教徒」の猛威に悩まされていた。それ故、「呪術について」の説教に出てくる「異教徒」という言葉には、聖書的な内容に即した意味とともに、イングランド人に実害を与えていたヴァイキングの存在も含まれていた、ということが考慮できる。しかし、この「呪術について」のテキストには、ヴァイキングを表す、いわゆる「デーン人」を意味する *ða Denisca* ('the Danes') の語は出現しない。そこで、本論ではこの「呪術について」のテキストにおいて、ヴァイキングの人々を対象にしていると考えられる表現を取り上げて、アルフリッチがヴァイキングを意識していたことを示したい。今回は、対象の語彙として、前述の hæðen の語と「悪魔」を意味する *scucca* という語を取り上げて分析をする。これら hæðen と *scucca* の語の分析を通じて、アルフリッチはこの説教を通じて、ヴァイキングに対する脅威を示していたことを論じたい。また、アルフリッチは自身の著述において、異教徒としてのヴァイキングに対して、再びイングランドへやって来たゲルマン民族文化およ

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐって
びその異教信仰をキリスト教説教者の立場から批判しているとも考えられ
る。

1. 古英語期の説教の性質とアルフリッチの『聖人伝』

6世紀から7世紀にかけて、キリスト教の浸透とともにキリスト教関連
文学が繁栄した。その大きな要因は、説教が数多く作成されたことである。
キリスト教の布教を目的として、聖職者たちはイングランド土着の俗人に
対して聖書それ自体や聖書関連の教えを説く際に、聖書の内容をわかりや
すく述べ伝える説教を作成した。そして、イングランドにおける説教は、
12世紀になって、様々な形式でその製作が最盛期を迎えた。古英語におけ
る説教の正確な数は断定できないが、270編ほどが残されているといわれ
ている。そのほぼ半数である130編がアルフリッチの作であり、ウルフス
タン (Wulfstan) の作は20編ほどである。そして、その残り120編ほどは作
者不明である¹⁾。古英語期の説教は、以前に書かれた説教の内容を書き直
すという傾向が強かったため、アルフリッチやウルフスタンのようにはっ
きりとその作者を特定できる方が稀である。無名の作家は、初期キリスト
教会の教父的またはカロリング王朝期の著作内容に加えて、聖書外典やア
イルランド・ラテン文学 (Hiberno-Latin) の内容も利用して説教を作成し
ていた。そして、アルフリッチやウルフスタンも彼らの前世代であるダン
スタン、アゼルウォルド、オズワルド (Dunstan, Æthelwold, Oswald) とい
った修道士たちによるイングランド修道院復興運動 (Monastery Reform) の
影響を受けて、兩人ともに厳格な正統派資料すなわち、教父的、カロリ
ング王朝の威厳のある著作を原典として説教を作成することに心血を注いで
いた。こうした理由から、10世紀中葉まではイングランドに原典を辿れ
る、かつ英語で書かれた純粋な説教というものはなかったと考えられてい
る²⁾。そして上記のように、古英語期の説教は、主にラテン語文献にその

原典を求めることができる。

アルフリッチは、当時英語で書かれた文献の誤りが多いことを嘆き、正しい内容を理解させるために説教を作成したといわれている。先述の理由に加えて、こうした理由からも正統な内容を伝えることに苦心した。また、その対象者は基本的に学のない俗人やアルフリッチの著作を利用して説教を行う説教者であることが『カトリック説教集』の序文等に述べられている。そのために、アルフリッチは分かり易い文体を意識して説教を作成した。一方、ウルフスタンは、ヴァイキングによって被害を受けた状況と終末論的側面を重ね合わせて、救済を求めるために正しいキリスト教の教えに従うことを主たる目的として説教を書き著した。故に、聖書の内容を解説するという説教の形式 (homily) よりもその内容を利用して論ず形式 (sermon) の意味合いが強く感じられる。また、強い口調による戒めが文体にも表れている³⁾。アルフリッチとウルフスタンの文体については、上記のように述べられるのが一般的であり、正確な分析である。しかし、その考えに基づくと、ウルフスタンはヴァイキングのキリスト教では受け入れられない非道な行為を目の当たりにしているため、彼の説教にはヴァイキングであるデーン人を意識していることは確からしいが、アルフリッチはそうではないとも受け取れる。アルフリッチが実際にヴァイキングであるデーン人から直接的な被害を受けているかどうかはわからないが、同時代のイングランドに生きていながら、ヴァイキングを意識することは当然なはずである。

今回扱う「呪術について」のテキストは、アルフリッチが書いた『聖人伝』の編集刊本において、17番目の話として収録されている⁴⁾。この『聖人伝』は2巻本で各巻40編の説教を含む『カトリック説教集』の続編としての位置づけがされている書物である。『聖人伝』は、アルフリッチがサーン・アバス (Cerne Abbas) で書いたとされ、この内容の写本が複数残され

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐっている。そして、書かれた時期は、西暦990年中葉から1000年の間と推定されている。内容としては、基本的に40編の聖者伝を扱っており、クリスマスからほぼ教会歴に即して、それぞれの日に関係する聖人の話が挙げられている。

アルフリッチのテキストにゲルマン民族の文化や慣習を仄めかす表現が含まれているかどうかについては、そのゲルマン民族の文化や慣習がどのようなものであるのかという定義が必要である。原始ゲルマン民族は文字を持たなかったので、文献資料として残っているにしても、当時の様子を後世の人々が口述によって伝えられた内容を示しているに過ぎない。そして、アングロ・サクソン期のイングランドにおける原始ゲルマン民族の文化や慣習についての文献は、キリスト教の普及による影響などがあり、非常に限られている。それ故、イングランドにおけるゲルマン民族的文化の全容は不明である。しかし、文献に関しては、ヴァイキングとして名を知られ、古ノルド語（Old Norse）を使用していたスカンジナビアの人々の間にはそうしたゲルマン民族の文化や慣習が根付いていた。その末裔であるアイスランド人は、古アイスランド語で古いゲルマン民族の文化や慣習を多く書き残しているため、この内容から原始ゲルマン民族の文化や慣習の様子を推測できる⁵⁾。

今回取り上げている「呪術について」は、キリスト教の立場から見て、異教による行為が人を惑わす行為とみなされ、そうした行為を通じて人々へもたらされる害悪、不利益を示している。アルフリッチはこの「呪術について」のテキストの中で、呪術的な行為について、詳述しているわけではない。アングロ・サクソン時代の呪術について、その定義をすべきであるが、様々な要素があるので、厳格な定義は難しい。今回の考察では、その点には立ち入らないこととする⁶⁾。そこで、本論ではゲルマン民族の文化や慣習といった際には、スカンジナビアやアイスランドの人々を書き

残した資料やゲルマン民族についてヨーロッパ大陸の人々によって書かれた資料に示されている内容を根拠にして考察する。

2. 「呪術について」の出典と *scucca* に関する考察

「呪術について」の概略は、先述のとおり、キリスト教の伝道者である使徒パウロが、偶像崇拝は悪であるということを旧約聖書の内容を利用して語っているというものである。この説教内容の原典は、これまでに多くの研究者によって分析されてきた。例えば、Meaney (1985) によると、聖書からはもちろんのこと、6世紀に活躍したアルルのカエサリウス (Caesarius of Arles) やブラガのマルティヌス (Martin of Braga) などを中心に説教の各所で、様々な原典を考えることができる⁷⁾。また、その集大成ともいえる電子データベースの *Fontes Anglo-Saxonici* には、その様々な原典として考えられている文献のリストが挙げられている⁸⁾。Meaney の分析では、「呪術について」を作成するにあたり、アルフリッチはカエサリウスを中心として様々な原典を参照していたかもしれないが、単純に先駆者の内容を切り貼りしていたのではなく、基本的には内容を考え、自身の言葉で書き換えていたと述べられている。それ故に、重要でない部分は削除や省略をし、自身の見解が必要な箇所には加筆をしている様子が見受けられる。こうしたことは、アルフリッチのそのほかの作品にも共通していえる。そして、Meaney によると、偶像崇拝の慣習に関して、アルフリッチはこの「呪術について」の中で敵対的な立場をとるのではなく、当時の現状のみを示していると述べられている⁹⁾。確かに、アルフリッチは聖書に反している異教的慣習について、表立った対立を示す表現をしていないといえる。しかし、分析の観点を変えてみることで、これまでとは異なるアルフリッチの意図を読み取ることができないだろうか。ここでは、そのひとつの例として、*sceocca* 'devil' という語彙を取り上げて分析し、その

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐって
考察に基づいてアルフリッチの意図について考察したい。

「呪術について」のテキストにある *sceocca* は、*scucca* の異綴りとして
出現する。そして、その意味は「悪霊、悪魔」である。古英語における「悪
魔」の意味を持つ語は、上記の *scucca* の他に *deofol* があり、今回のテキ
スト中にも20箇所に見られる。*deofol* に関しては、部分的に関連箇所
で触れる。ここでは、この「呪術について」のテキストにおいて、*sceocca*
の使用例から、アルフリッチの悪魔に対する思考、態度を考えたい。テキ
ストには4箇所で見られるので、その各所を取り上げる。まず51行目に定
冠詞 *se* を付けた *se sceocca* が出現する。

Oðer deofolgild is derigendlic þære sawle.

ðonne se man forsihð his scyppendes beboda.

and þa sceandlican leahtras begæð. þe se sceocca hine lærð. (ll. 49-51)¹⁰⁾

‘Another idolatry is hurtful to the soul

when the man despises his Creator’s commandment

and practices the shameful sin which the devil teaches him.’

(49から51行目、下線部と試訳は著者による。以下同様。)

この部分は、*Fontes Anglo-Saxonici* によると、34行目から46行目まではコ
リントの信徒への手紙1の6章9節、10節あたりの内容である偶像崇拜、
姦通、泥棒、強欲等の不道德である行為を避けるよう戒めている部分を利用し、さらに52行目から63行目まではガラテヤの信徒への手紙5章22節あたりを利用して、愛や喜び、平和といった霊の実の内容を示しているようである。そして、47行目から48行目、およびここで引用した49行目から51行目までのところは、*Fontes Anglo-Saxonici* では具体的な原典を示している箇所がない。しかし、この後に続く内容のガラテヤの信徒への手紙5章

19節から21節にある肉の業（わざ）を列挙している中にある偶像崇拜の部分だけを取り上げて、その内容を膨らましているように見える。すると、この51行目に現れる *sceocca* は、偶像崇拜という点で、アルフリッチの思考や態度が透けて見える部分であるとも考えられる。そして、アルフリッチはここで、「悪魔」に対応する語として *sceocca* を利用した。この47行目から51行目の部分で、アルフリッチは偶像崇拜の批判として、2点述べている。*sceocca* が出現するのは、その2つ目の部分である。偶像崇拜は、悪魔に唆されて恥ずべき罪を犯した際に、その魂を害するという内容である。ここでの悪魔という語には、ヴァイキングを暗に含んだ意図を強く感じる部分とはいえないかもしれない。しかし、その前にある偶像崇拜への批判にもあるように、悪魔的な異教の行為に屈するといった内容は、その時代ヴァイキングによってなされた行為を容易に連想させるので、ヴァイキングを悪魔とみなす観点があったのかもしれない。また、アルフリッチが *sceocca* の語を利用した理由のひとつとして、語頭の音がその直前の *sceandlican* ‘shameful’ と韻を踏むということがいえるだろう。

次に99行目に現れる *scucca* へと、分析の対象を移す。

Ac seðe hwider faran wille. singe his paternoster.
and credan. gif he cunne. and clypige to his dryhten.
and bletsige hine sylfne. and siðige orsorh
þurh godes gescyldnyse. butan ðæra sceoccena wiglunga. (ll. 96-99)¹¹⁾
‘But the man who wants to go whither would sing his Lord’s Prayer
and the Creed, if he knows, cries out to his Lord,
signs with the cross, and goes without care
through God’s protection, without the devils’ sorcery’

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐる
Fontes Anglo-Saxonici では、68行目から221行目にかけて、カエサリウスの『説教』(Sermon)の内容を利用していることが示されている。このテキスト全体は271行なので、全体の大半でその原典として利用されている。ここでは、*scucca*の含まれる文章以外の部分の内容も含めて考察する。67行目には、聖アウグスティヌス(Augustine)の言及によると、という導入文がある。そして、68行目から74行目までは、カエサリウスの『説教』54「予知を信じるだけでなく、さらに悪いことに異教の方法で占い師、予言者、易者に助言を求める人々への忠告」の第1章に書かれている最初の部分が利用されている。そして、88行目には鳥の歌声から予兆を感じ、それを発することを戒めている部分がある。これも同様にカエサリウスの『説教』54第1章に述べられている内容であるが、アルフリッチのテキストには鳥だけでなく、馬や犬といった動物が追加されている¹²⁾。この理由のひとつとして、アルフリッチがゲルマン民族文化の慣習を考慮している可能性が挙げられる。例えば、ブレーメンのアダム(Adam of Bremen)の『ハンブルク教会史』(*Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*)によると、ゲルマン民族の文化、慣習として、馬や犬を生贄として捧げていたといわれている¹³⁾。アルフリッチはこうしたゲルマン民族の古い慣習について、それを当時もまだ信仰していたスカンジナビア由来のヴァイキングを通じて知っていたはずである。そして、ヴァイキングの人々を含めた異教行為の禁止を訴えているようである。ここでの本題である99行目の *sceoccena* 'devils' を含む部分は、カエサリウスの『説教』54第1章後半部で述べられている内容である¹⁴⁾。しかし、カエサリウスのテキストには、アルフリッチの *butan ðæra sceoccena wiglunga* 'without the devils' sorcery' に対応する部分がない。これは、アルフリッチが異教の呪いに対して強く意識を示しているからこそ付け加えた部分であると考えられる。そして、*scucca* が複数属格の形を取っているので、「様々な」悪魔を想定している

とも考えられる。そうすると、ヴァイキングの信仰していたゲルマン的民族文化の神々も含めることができるかもしれない。

そして、105行目にある *scucca* の例を挙げるが、ここでは *scucca* の語が含まれる文章のみならず、その前の内容をも合わせて考えたい。

Us sceamað to secgenne ealle ða sceandlican wiglunga.
þe ge dwæs-menn drifað. ðurh deofles lare.
oððe on wifunge. oððe on wadunge.
oððe on brywlace. oððe gif man hwæs bitt
þonne hi hwæt onginnað. oþþe him hwæt bið acenned.
Ac wite ge to soðan. þæt se sceocca eow lærð
þyllice scincraeftas. þæt he eowre sawla hæbbe
ðonne ge gelyfað his leas-brædnysse. (ll. 100-107)¹⁵⁾
'It is shameful to tell us all the shameful sorceries
that you foolish man practise through devil's teaching
whether in marrying, or in travelling
or in brewing, or if a man prays for anything
when people begin something or something is born to them.
But you know as the truth that the devil teach you
such sorceries that he would seize your souls
when you believe in his lying'

この部分は、ブラガのマルティヌスによる『野蛮人への叱責について』(De Correctione Rusticorum 'On the Correction of the Rustic') の第12章の最初の文章が原典であるといわれている。このテキストは、アルフリッチが作成した説教である「異教の神々について」(De falsis diis 'On false gods') にお

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐっていても、主要な原典として使用されている。そして、「呪術について」のテキストは、「異教の神々について」とほぼ同時に書かれたと思われるほど表現や内容的に重なる部分が多い¹⁶⁾。Fontes Anglo-Saxoniciによると、アルフリッチのテキストには、100行目から107行目と129行目から135行目、143行目から147行目の3箇所の部分にマルティヌスからの内容を利用したと考えられる部分がある¹⁷⁾。その最初のまとめり(100行目から107行目)のうち、100行目から104行目では、結婚や旅行、醸造の際に悪魔的な呪いを行うことへの批判が述べられている。そのうち、結婚と旅行については、マルティヌスのテキストにあるような具体的な内容は避けている。そして、アルフリッチのテキストにのみ示されている醸造については、ビールの醸造について述べていると思われる。タキトゥス(Tacitus)の『ゲルマニア』(Germania)にあるように、ゲルマン民族が見境なくビールを飲んでいる様子は当時のヴァイキングでも同様であったのであろう¹⁸⁾。ここも推論となるが、こうした表現にもヴァイキング批判が含まれているのではないだろうか。そして、この部分の sceocca に関しては、ヴァイキングとして考えることに無理がありそうである。それを承知の上で考えてみると、ヴァイキングに屈するということはすなわち、その被害者は殺されて、その人々の魂は奪われることを意味する。ウルフスタンの『ウルフスタンによるイングランド人に対する説教』(Sermo Lupi ad Anglos)等の記述においても、ヴァイキングに征服されたことを運命として嘆く話があるが、それは悪魔の誘いに乗って不誠実な行為をしてきたからであるというこの部分の内容に沿っているとも思われる。

最後に179行目の sceocan を取り上げる。この語を含む文章は177行目から179行目になるが、この箇所の原典はない。この箇所の直前は、カエサリウスを原典とした内容があり、またこの箇所の後には聖書のマタイによる福音書の10章29節にある2羽のスズメの話をもとにした話が挿入され

ている。以下に、引用の部分を挙げる。

God is eall godnyss. and he æfre wel wile.
ac manna yfelnyssse mod beon gestryrod.
þonne geðafað god þam sceoccan for oft.
þæt he men geswence for heora mis-dædum. (177-80)
'God is all goodness and He ever desires well,
but minds of men are excited to evilness;
then God permits the devil very often
so that he troubles men for their misdeeds.'

この部分の内容も先述の105行目の分析で述べたように、イングランド人がヴァイキングに征服されたことを仄めかす内容と重なる。この箇所は、神がヴァイキングにイングランドの地を与えたのは、イングランド人自身の行為故であると読み取ることできる。そして、この箇所はアルフリッチが原典を利用せずに書いたとされていることから、アルフリッチの印象が現れているといつてよい。

ここまで、*scucca* という語またはその関連箇所を通じて、表には現れていないアルフリッチによるヴァイキングに対する意識や態度について考察した。やや推論的要素が強いが、以上の考察からアルフリッチの記述は当時のイングランドの大半を蹂躪したヴァイキングに対しても悪魔的な所業に関連して、彼らを意識していると読み取れる。このテキストは聖書的な内容を基盤として作成されているので、悪魔として聖書的な「サタン」を意図していることは疑いない。実際、古英語では定冠詞 *se* を付した *se scucca* は「サタン」の意味でも使用されることが多い。また、「悪魔」を意味する語として、*sceoccca* と *deofol* の2つの語の使い分けには、アルフ

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐるリッチの文体上の特徴である韻を踏むという要素が大きな理由として考えられる。そうした条件のもとで、アルフリッチは悪魔という表現を巧みに利用して、比喩的にヴァイキングであるデーン人をも含めているようだ。さらに「呪術について」のテキスト全体の流れとして、聖書の内容を引用しながら、悪を正すということは、その時代のイングランドにおいて、悪の立場に見られているヴァイキングを外すことはできないはずである。最後に *scucca* という語に関することとして、この語は辞書の見出しで確認してみても複合語としては、*scuccgild* 'idol' くらいであり、その他には地名に利用されている¹⁹⁾。もうひとつの悪魔という語である *deofol* の複合語は20以上あるので、それと比較して考えても、この場面で使用されている *scucca* という語に含まれた意味はもっと深いところにあるのかもしれない。

3. 異教徒という語を巡って——*hæðen* 関連箇所分析

古英語の様々な文献において、「異教徒」*hæðen* という直接的にヴァイキングを指し示すのに使用された語が、この「呪術について」のテキストにおいても度々用いられている。これまでも述べてきたように、このテキスト自体が聖書の物語を基にして書かれているので、異教徒といえば、カトリックの世界におけるユダヤおよびギリシャ・ローマの異教を信仰する人々のことを指しているのは当然である。しかし、アングロ・サクソン期のイングランド地域における状況を鑑みると、*hæðen* という語やその関連語がゲルマン民族文化をまだ捨てきれていない主にデーン人から構成されるヴァイキングに対しても宛がわれているはずである。故に、ここでは *hæðen* という語やその関連語句について分析をする。

「呪術について」のテキスト中に、*hæðen* 関連語は5箇所に見れる。簡単に列挙しておく、最初に25行目の *hæðen gild*、その次に39行目の

hæðen gildum, 48行目の hæðenscype, 80行目の hæðenum, 最後に150行目の hæðen である。ここでも、そのそれぞれについて、例文を示して分析を行う。まず、25行目の hæðen gild を含む部分で、24行目から28行目を用いて分析する。

Paulus cwæð. swutele synd þæs flæses weorc. þæt is forligr. and unclænnys. estfulnyss. oððe galnyss. hæðen-gild. oððe unlybban. feondræden. and geflit. anda. and yrre. sacu. and twirædnys. dwollic lár. and nið. mansliht. and druncennyss. oferfyll. and oðre ðyllice. þe ic fore eow scege swa swa ic fore [sæde]. (ll. 24-28)²⁰⁾

‘Paul said the works of the flesh are clear, which are Adultery and uncleanness, devotion or lust, idolatry or witchcraft, hatred and strife, envy and anger, feud and discord, heretical teaching and enmity, murder and drunkenness, gluttony and other such as I have said to you before;’

この部分では、前段 *scucca* の最初の例で挙げた部分と同様で、新約聖書中のガラテヤの信徒への手紙5章19節から21節にある肉の業における悪行といわれる内容の列挙である。55行目の部分では、それより先であるこの24行目から28行目の部分でその列挙を行っているという点から繰り返しを避け、かつ、とりわけ偶像崇拝の非難に焦点を当てているようである。作成時期は異なるが、欽定訳聖書の表現とここでの表現とを比べてみると、ほぼ同一である。表現の違いを指摘するならば、アルフリッチは自身の文体に従って、分かり易く内容を伝えるために対句を用いているが、欽定訳聖書では対句的には表現されていない。ここで考慮している *hæðen-gild* ‘*idolatry*’ は、*unlybban* ‘*witchcraft*’ という語と対を成している。後者の un-

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐる

lybba は *Bosworth & Toller* によると、2 番目の 'poison used for purposes of witchcraft, witchcraft, sorcery' という意味の部分に、この箇所が例文として挙げられている。この unlybba は、第一義として poison が来るので、呪術は毒のようなものとしてみなされていたのかもしれない。毒とゲルマン民族文化との関わりは、北欧神話に見いだせる²¹⁾。古ノルド語における eitr 'poison' であり、古英語においても同じ意味を持つ átor という語が存在する。北欧神話における毒の話として、最初の巨人であるユミル (Ymir) がオーデン (Odin) らに殺された際に出た血は猛毒で、巨人たちの大半を死滅させたという話がある。多少行きすぎた考察であるが、毒はもちろん悪いものであり、原始的ゲルマン民族文化を引き継いでいるヴァイキングに通ずるところがあるといえる。10世紀末当時のイングランドに、こうした北欧神話の具体的な思想があったとは思えないが、古いゲルマン民族文化に通ずる毒のイメージを持っていたため、アルフリッチはこの場面で hæðen-gild の語と対にしたのかもしれない。

続いて、39行目の hæðen gildum を含む箇所を検討する。この箇所の原典は、先の scucca の最初の例でも述べたとおり、コリントの信徒への手紙1の6章9節、10節あたりの内容であると考えられている。ここでは38行目から44行目を引用している。この部分の直前にラテン語で述べられている部分があるが、以下の引用はそのラテン語の内容を古英語で訳している箇所である。

Mine gebroðra nelle ge dwelian. naðor ne unriht-hæmeras. ne ða ðe hæðen-gilum þeowiað. ne ða þe oðre manna wif habbað. ne ða hnescan vel wacmod. þæt synd þa ðe nane stiðnyse nabbað ongean Leahtras. Ne ðeofas. ne gytseras. ne drinceras. þæt synd þa ðe druncennysse lufiað. ne wyrgendras. þæra muð bið symle mid geættrode wyrigunge afylled.

ne reaferas. nabbað hi næfre godes rice. (ll. 38-44)

‘My brethren, you don’t be deceived neither by fornicators nor by those who follow idolatry, nor by those who have other men’s wives, nor by effeminate or morally weak ones who have no sternness against sins, nor by thieves, nor by coveters, nor by drinkers who love drinking, nor by revilers whose mouths are always filled with poisoned cursing, nor by robbers, who will not have God’s kingdom.’

ここでの hæðen-gilum ‘idolatry’ の語彙は、他の箇所でもそうであるが、その語の前に unriht-hæmeras ‘fornicators’ とあり、そのうちの hæmeras の部分と韻を踏むために採用されたと考えるのが大きな理由であろう。列挙の順序から見ると、hæðen-gilum の語を挟む前後の内容が、不義を犯す者ということで重複している。ここは、欽定訳聖書におけるコリントの使徒への手紙 1 の 6 章 9 節の部分とその順序が一致している。偶像崇拜をするということがこの順序で述べられている意味や意図はわからない。そして、アルフリッチも聖書的な内容として、hæðen-gilum を使用しただけでヴァイキングを含めた意図を強く感じる箇所ではないといえる。

その次の hæðen を含む例は、興味深い点がある。48行目の hæðenscype を含む箇所である。この箇所は、先述の34行目から46行目まではコリントの信徒への手紙 1 の 6 章 9 節、10 節あたりの内容の続きで、そこからさらに52行目から63行目まではガラテヤの信徒への手紙 5 章22節あたりの内容へとつながる箇所である。これも前段 scucca の最初の例で述べているが、47行目から48行目、およびここで引用した49行目から51行目までのところは、原典が見当たらない箇所である。まずは、その箇所を引用する。

Deofol-gild bið þæt man his drihten forlæte. and his cristendóm. and to

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐって
deofollicum hæðenscype gebuge. bysmrigende his scyppend. (ll. 47-48)
'Idolatry is that a man forsake his Lord and his Christianity, and yield to
diabolical heathenism, reproaching his Lord'

この箇所では、偶像崇拝とはどのようなものであるのかという説明を述べている。そして、この箇所の続き（49行目から51行目）にもうひとつ偶像崇拝について述べているが、それは前述したとおり、偶像崇拝による害悪を述べている。この47行目から51行目は原典がなく、アルフリッチが意図的に付け加えた箇所であるとみられる。故に、アルフリッチの偶像崇拝に対する態度がここから透けてうかがえる。そして、この状況において、hæðen-という語を選択しているところに意味がありそうである。『アングロ・サクソン年代記』（*The Anglo-Saxon Chronicle*）でも繰り返し述べられているように、ヴァイキングはイングランドにて悪行の限りを尽くした。そして、都市の破壊、財宝の奪取といった所業は和平を破って行われることも多かった。そうした悪魔的な行為は、まさしく deofollicum hæðenscype として表現するにふさわしい。この部分は、アルフリッチが独自の説明を加えている箇所である。当時のヴァイキングの所業を含めた表現をしているひとつの例として、さらに同様な状況下での他の例と比較検討する必要がある。

4番目の hæðen 関連語彙の箇所として、80行目の hæðenum を含む部分へと話を移す。以下に75行目から81行目までの箇所を引用する。

Nu alyse ic me sylfne wið god. and mid lufe eow for-beode.
þæt eower nan ne axie þurh ænigne wicce-craft.
be ænigum ðinge. oððe be ænigre untrummysse.
ne galdras ne sece. to gremigenne his scyppend.

forðan se ðe þys deð. se forlysð his cristen-dom.
and bið þam hæðenum gelic. þe hleotað be him sylfum
mid ðæs deofles cræfte þe hi fordeð on ecnysse. (ll. 75-81)
'Now, I rescue myself according to God, and forbid to you with love
that none of you ask for any witchcraft
about anything or about any sickness,
or seek spells to enrage his Lord,
for he who does this abandon his Christianity
and is like the heathen who draw lots as regards themselves
with the diabolical skill which will destroy them forever'

この箇所はカエサリウスの原典を利用して書かれたとされる。ここで出てくる hæðenum は、まさしく「異教徒」その人々であるが、この語を説明する関係詞節の内容からヴァイキングの人々を指していることが明らかである。なぜなら、この関係詞の内容は、「くじを引く」という起源は不明であるもののゲルマン語族諸語に広く現れる語彙で、ゲルマン民族の文化といえるものである²²⁾。この hæðenum 以下に関する内容は、もちろんカエサリウスの記述にはなく、アルフリッチが手を加えた部分である。アルフリッチはこうした行為を「悪魔的な業」とみなしているところから、やはり原始ゲルマン民族的な慣習を持つヴァイキングの人々を悪魔的な行為を行う者として非難していると考えられる。

hæðen の語に関する最後の例として、155行目に出てくる hæðen を取り上げる。この箇所を含む148行目から156行目は、*Paenitentiale Ecgberhti* または *the Paenitentiale Pseudo-Ecgberhti* として知られるエグバート (Ecgberht 'Egbert') に関連する書物の内容に類似している²³⁾。ここでは、上記の箇所を引用する。

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐって

Eac sume gewitlease wif farað to wega gelætum.
and teoð heora cild þurh ða eorðan.
and swa deofle betæcað hi sylfe. and heora bearn.
Sume hi acwellað heora cild ærðam þe hi acennede beon.
oððe æfter acennednysse. þæt hi cuðe ne beon.
ne heora manfulla forligr ameldod ne wurðe.
ac heora yfel is egeslic. and endeaslic morð.
Ðær losað þæt cild laðlice hæðen.
and seo arlease modor. butan heo hit æfre gebete. (ll. 148-56)
'Likewise some of mad women go to cross-roads,
draw their children through the earth,
and dedicate themselves and their children to the devil.
Some of them kill their children before they are born
or after birth, so that they are not known
nor their wicked fornication is let out.
Then the child is lost, a hateful heathen,
and the wicked mother, unless she does make amends for it.'

8世紀中葉にヨーク大司教の職に就いていたエグバートはビード（Bede）の弟子であった。このテキストに限らず、アルフリッチはビードの引用も多いため、その関連としてエグバートの資料にも精通していたであろう。そして、*Fontes Anglo-Saxonici*によると、この箇所は *Paenitentiale Ecgberhti* の第4章、および第2章の一部の内容との類似である²⁴⁾。この部分には、古代ゲルマン民族の風習に関する内容が含まれている。母親が自身の子を殺して、悪魔に捧げるという内容であるが、ゲルマン民族の社会に特徴的であるのは、それを行う場所として示される「十字路」であ

る。人間の子に限らず、生贄を十字路に捧げるという内容は、ゲルマン民族の文化を豊富に伝える中世アイスランド語文献にも示されている²⁵⁾。そして、嬰兒殺しの点に関して、タキトゥスはゲルマン民族の社会では跡取りの後に生まれた子を殺すようなことはしない、と述べているが、ゲルマン民族の社会では、口減らしとしての嬰兒殺しがあったようである²⁶⁾。嬰兒殺しへの批判は、キリスト教社会、特にカトリックの世界では痛烈であることから、アルフリッチはキリスト教文化の点から、異教徒批判を行っているものの、その対象としてゲルマン民族の文化や風習の批判も織り交ぜているといえる。また、ここでの *hæðen* の語は、直前の母親によって殺される子供の言い換えとして使用されている。この子供は洗礼される前であることから、アルフリッチはこの子供を異教徒とみなして、*hæðen* の語を使用したと考えられる²⁷⁾。これまでの考察から、この部分の *hæðen* の語は、ゲルマン民族的な文化を汲むヴァイキングの人々に足して用いられた語とみなせる。

これまで、「呪術について」のテキストにおける *hæðen* 関連の語を含む箇所についての考察を行った。前述の *scucca* の考察と重なる部分もあったが、この *hæðen* 関連語句の箇所もゲルマン民族の文化や風習といった要素を考慮してみると、アルフリッチが当時イングランドで猛威を振るったヴァイキングを意識して記述していると感じさせる箇所が多かった。アルフリッチによる記述のみを追っていくと、異教徒としての対象者はおぼろげであり、キリスト教への信仰を見つめなおすことが重要であり、異教の行為については詳述したくないようである。しかし、それは表面的な感覚であり、語彙と内容とを分析してみると、異教徒の対象者としてヴァイキングの存在が現れてくる。

4. おわりに

ここまで、「呪術について」のテキストにおける異教徒として、ゲルマン民族的な文化や風習を保っていたといわれるデーン人を中心としたヴァイキングに対するアルフリッチの態度を考察してきた。この「呪術について」のテキストにおいて、表面上明確にヴァイキングについて述べている箇所はない。しかし、アングロ・サクソン時代のイングランドの人々にとって、異教徒といえはまずヴァイキングを想定するのは当然であろう。そして、その意識はもちろんアルフリッチにもあったはずである。テキストの内容について、語彙的な分析やゲルマン民族的な文化や風習における知識を利用することで、アルフリッチは暗に異教徒としてヴァイキングをも想定し、聖書の物語に登場する異教徒とともにヴァイキングの行為や信仰も批判しているといえることができる。本稿でも *hæðen* の分析の段で引用に含めたが、81行目に現れる *deofoles crafte* ‘diabolical skill’ という語句がある。この語句は、分析の結果、ゲルマン民族的異教を指していたと述べた。その観点から見ると、それ以外の *deofol* 関連箇所すべてにヴァイキングを想定した意識があるとも考えられる。

今回の考察では、ゲルマン民族的な文化、慣習における呪術についての深い考察を行っていない。それ故に、例えば、ゲルマン民族に特有の呪術の形式が示されていれば、それこそがアルフリッチのゲルマン民族文化に対する意識を示す要素となる。また、語彙の分析を行ったが、本文中でも述べたように、これはアルフリッチに特徴的である対句といった文体や語彙選択があるため、部分的に都合の良い解釈となってしまう可能性がある。しかし、そうしたことも含めて、アルフリッチがヴァイキングを意識して語彙を選択した結果、このような分析ができたとも考える。さらに語彙の面では、今回は触れなかったが、80行目に現れる *wicce-craft*

‘witchcraft’ のような語彙も考慮する必要がある。

注

- 1) ‘Homilies’ in *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*, p. 241.
- 2) Fulk and Cain, *A History of Old English Literature*, p. 72.
- 3) *Ibid.*, p. 82.
- 4) Skeat, *Aelfric’s Lives of Saints: part II.i*, pp. 365–83.
- 5) ‘Paganism’ in *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*, p. 351.
- 6) アングロ・サクソン時代のイングランドにおける「呪術」に関しては、様々な研究がなされている。19世紀中葉以降、薬草や呪術に関する編集刊本や研究書が出版されているが、その当初は薬草や呪術は科学的な効用がないとして否定的に扱われていた。しかし、近年では、その考え方が見直され、アングロ・サクソン時代当時の人々の考え方を反映する資料のひとつとして見直されている。例えば、M. L. Cameron, *Anglo-Saxon Medicine* を参照。そして、アングロ・サクソン時代における呪術の定義に関しても、例えば M. L. Cameron も述べているように、W. Nöth, ‘Semiotics of the Old English Charm’ in *Semiotica* 19, 1977, p. 66. で示されている記号論的な観点からの定義を参照。
- 7) Audrey Meaney, ‘Ælfric’s use of his sources in His homily on Auguriis’, *English Studies*, vol. 66.6, pp. 491–95.
- 8) 「呪術について」テキストの内容における原典は、下記の *Fontes Anglo-Saxonici* のウェブサイトページで示されている。http://fontes.english.ox.ac.uk/data/content/astexts/title_sources.asp?refer=C.B.1.3.18&flag=1&pagesize=25
- 9) Meaney, p. 495.
- 10) Skeat, p. 366.
- 11) *Ibid.*, p. 371.
- 12) *Witchcraft in Europe, 400–1700: A Documentary History*, p. 48. また、アルフリッチとカエサリウスのテキスト比較は Meaney, p. 481 に掲載されている。
- 13) 原始ゲルマン民族文化の慣習に関しては、以下の文献を参考にした。Adam of Bremen, trans. by Francis J. Tschan, *History of the Archbishops of Hamburg-Bremen* (New York: Columbia University Press, 2002), Thor Ewing, *Gods and Worshipers: In the Viking and Germanic World* (Tempus, 2008).
- 14) *Witchcraft in Europe, 400–1700: A Documentary History*, p. 48.

アルフリッチ『聖人伝』の「呪術について」の説話における異教徒をめぐって

- 15) Skeat, p. 371.
- 16) Meaney, p. 480.
- 17) 先述の *Fontes Anglo-Saxonici* のウェブサイトから結果を参照。
http://fontes.english.ox.ac.uk/data/content/astexts/title_sources.asp?refer=C%2EB%2E1%2E3%2E18
- 18) Tacitus による *Germania* 第1部23章では、ゲルマン民族の人々は、ローマの人々の飲むワインと比べて、劣悪なビールを飲む、と述べられている。
- 19) *An Anglo-Saxon Dictionary*, ed. by Bosworth and Toller, p. 843.
- 20) Skeat, pp. 364, 366.
- 21) 北欧神話は、英語、日本語ともに様々な訳書がある。ここでは参考になる図書の一例を挙げておく。V・G・ネッケル、H・クーン他編『エッダ 古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、1973年。
- 22) ‘Lot’ in *The Dictionary of English Etymology*, p. 537を参照。
- 23) *Fontes Anglo-Saxonici* のウェブサイトの結果を参照。
http://fontes.english.ox.ac.uk/data/content/astexts/source_details.asp?source_ref=C%2EB%2E1%2E3%2E18%2E024%2E01
- 24) *Fontes Anglo-Saxonici* のウェブサイトの結果を参照。
http://fontes.english.ox.ac.uk/data/content/astexts/title_sources.asp?whichpage=2&pagesize=25
- 25) 特に、西暦1000年に起こったアイスランドにおけるキリスト教への改宗にまつわる話に、この内容が示されている。Sián Grønlie, trans., *Íslendingabók Kristni Saga: The book of Icelanders* を参照。
- 26) *Germania*, part I, ch. 19. を参照。
- 27) Meaneyがこの点について述べている。Meaney, p. 488. を参照。

参考文献

- Bosworth, J. and Toller, T. N., *An Anglo-Saxon Dictionary*, Oxford: Clarendon Press, 1898-1921.
- Cameron, M. L., *Anglo-Saxon Medicine*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Ewing, Thor, *Gods and Worshippers: In the Viking and Germanic World*. Tempus, 2008.
- Fontes Anglo-Saxonici*, <http://fontes.english.ox.ac.uk/>
- Fulk, R. D. and Cain, C. M., *A History of Old English Literature*, Malden: Blackwell, 2003.

- Grønlie, Siân, trans., *Íslendingabók Kristni Saga: The book of Icelanders*. London: Viking Society for Northern Research, 2006.
- Kors A. C. and E. Peters, eds., *Witchcraft in Europe, 400-1700: A Documentary History*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2001.
- Lapidge, Michael, et al., eds., *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*. Oxford: Blackwell, 1999.
- Meaney, Audrey, “Ælfric’s use of his sources in His homily on Auguriis”, *English Studies*, vol. 66. 6, 1985, pp. 491-95.
- Nöth, W, “Semiotics of the Old English Charm”, *Semiotica* 19, 1977 , pp. 59-83.
- Onions, C. T., ed., *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Oxford: Clarendon Press, 1966.
- Ribes, J. B., *Germania*, Oxford: Clarendon, 1999.
- Skeat, W. W., ed., *Ælfric’s Lives of Saints*, EETS OS 76, 82, 94 and 114, London: Oxford University Press, 1881-1900.
- Tschan, F. J., trans., *History of the Archbishops of Hamburg-Bremen*. New York: Columbia University Press, 2002.
- V・G・ネッケル, H・クーン他編『エッダ 古代北欧歌謡集』谷口幸男訳, 新潮社, 1973年。